

ママたちの震災 ⑩

1本の電話が入った。「赤ちゃんのことです。困っている。来てもらえないか」

助産師の伊藤怜子さんたちがママサロンを開いている時だった。仮設住宅で支援活動をしている男性の看護師から要請された。

震災から約8カ月。仮設住宅で暮らし、外出がままならない母親たちに支援が十分に行き届いていなかった。「子育て中の母親に対する周囲の配慮はなく、お母さんたちはストレスをため込んでいた。不衛生なひどい環境だった」

妊婦は？個人情報壁

これをきっかけに、伊藤さんたちは仮設住宅を回り始めた。



助産師らによる仮設住宅訪問。伊藤怜子さん提供

行政に確認すると、大船渡市、陸前高田市に妊婦は約200人、0歳児は約310人いた。ただ、仮設住宅にいるかどうかは個人情報を理由に教えてもらえなかった。「子どもたちのことが心配。待っていても情報は入らない。こちらから動かない」と。仮設住宅などを100回以上、手分けして訪ねた。そこでぶち当たったのが、またもや個人情報保護の壁だった。

仮設住宅を管理している人に、妊婦や赤ちゃんがいる家庭を尋ねると、返ってくるのは「個人情報は教えられない」という答えだった。